小さい太郎の悲しみ

新美南吉

青空文庫

一

お花畑から、大きな虫がいっぴき、ぶうんと空にのぼりはじめました。

からだが重いのか、ゆっくりのぼりはじめました。

地面から一メートルぐらいのぼると、横にとびはじめました。

やはり、からだが重いので、ゆっくりいきます。うまやの角の方へのろのろとゆきます。

みていた小さい太郎は、縁側からとびおりました。そしてはだしのまま、箙をもって追っかけてゆきました。

うまやの角をすぎて、お花畑から、麦畑へあがる、草の土堤の上で、虫をふせました。

とってみるとかぶと虫でした。

「ああ、かぶと虫だ。かぶと虫をとった」

と小さい太郎はいいました。けれどだれもなんともこたえませんでした。小さい太郎は兄弟がなくてひとりぼっちだったからです。ひとりぼっちということはこんなときたいへんつまらないと思います。

小さい太郎は縁側にもどってきました。そしておばあさんに、

「おばあさん、かぶと虫をとった」

とみせました。

縁側にすわっていねむりしていたおばあさんは、眼をあいてかぶと虫をみると、

「なんだ、がにかや」

といって、まためをとじてしまいました。

「ちがう、かぶとむしだ」

と小さい太郎は口をとがらしていいましたが、おばあさんには、かぶと虫だろうが蟹だろうが、かまわないらしく、ふんふん、むにゃむにゃといって、ふたたび眼をひらこうとしませんでした。

小さい太郎は、おばあさんの膝から糸ぎれをとって、かぶと虫のうしろの足をしばりました。そして縁板の上を歩かせました。

かぶと虫は牛のようによちよちと歩きました。小さい太郎が糸のはしをおさえると、まえへ進めなくて、カリカリと縁板をかきました。

しばらくそんなことをしていましたが、小さい太郎はつまらなくなってきました。きっと、かぶと虫にはおもしろい遊び方があるのです。だれか、きっとそれを知っているのです。

二

そこで小さい太郎は、大頭に麦わら帽子をかむり、かぶと虫を糸のはしにぶらさげて、かどぐちを出てゆきました。

ひるはたいそうしずかで、どこかでむしろをはたく音がしているだけでした。

小さい太郎は、いちばんはじめに、いちばん近くの、桑畑の中の金平ちゃんの家へゆきました。金平ちゃんの家には七面鳥を二羽かっていて、どうかすると、庭に出してあることがありました。小さい太郎はそれがこわいので、庭まではいってゆかないで、いけがきのこちらからなかをのぞきながら、

「金平ちゃん、金平ちゃん」

と小さい声でよびました。金平ちゃんにだけ聞こえればよかったからです。七面鳥にまで聞こえなくてもよかったからです。

なかなか金平ちゃんに聞こえないので、小さい太郎はなんどもくりかえしてよばねばなりませんでした。

そのうちに、とうとううちの中から、

「金平はのオ」

と返事がしてきました。金平ちゃんのお父さんのねむそうな声でした。「金平は、よんべから腹がいとうてのオ、ねておるだで、今日はいっしょに遊べんぜエ」

「ふウん」

と聞こえないくらいかすかに鼻の中でいって、小さい太郎はいけがきをはなれました。

ちょっとがっかりしました。

でも、またあしたになって、金平ちゃんのお腹がなおれば、いっしょに遊べるからいいと思いました。

三

こんどは小さい太郎は一つ年上の恭一君の家にゆくことにしました。

恭一君の家は小さい百姓家でしたが、まわりに、松や椿や柿や橡などいろんな木がいっぱいありました。恭一君は木登りがじょうずでよくその木にのぼっていて、うかうかと知らずに下を通ったりすると、椿の実を頭の上に落としてよこして、おどろかすことがありました。また木にのぼっていないときでも恭一君はよく、もののかげや、うしろから、わっといってびっくりさせるのでした。ですから小さい太郎は、恭一君の家の近くにくると、もう油断ができないのです。上下左右、うしろにまで気をつけながら、そろりそろりとすすんでゆきます。

ところがきょうは、どの木にも恭一君はのぼっていません。どこからも、わっといってあらわれてきません。

「恭一はな」と、鶏に餌をやりに出てきたおばさんが、きかしてくれました。「ちょっとわけ

があってな、三河の親類へ昨日、あずけただがな」

「ふウん」

と小さい太郎は聞こえるか聞こえないくらいに鼻の中でいいました。なんということでしょう！　なかのよかった恭一君が、海の向こうの三河のある村にもらわれていってしまったというのです。

「そいで、もう、もどってきやしん？」

と、せきこんで小さい太郎はききました。

「そや、また、いつかくるだらあずに」

「いつ？」

「盆や正月にゃくるだらあずにな」

「ほんとだね、おばさん、盆と正月にゃもどってくるね」

小さい太郎はのぞみを失いませんでした。盆にはまた恭一君と遊べるのです。正月にも。

四

かぶと虫を持った小さい太郎は、こんどは細い坂道をのぼって大きい通りの方へ出てゆきました。

車大工さんの家は大きい通りにそってありました。そこの家の安雄さんは、もう青年学校にいっているような大きい人です。けれどいつも小さい太郎たちのよい友だちでした。陣とりをするときでも、かくれんぼをするときでもいっしょに遊ぶのです。安雄さんは小さい友だちからとくべつにそんけいされていました。それは、どんな木の葉、草の葉でも、安雄さんの手でくるくるとまかれ、安雄さんのくちびるにあてると、ぴいと鳴ることができたからです。また安雄さんはどんなつまらないものでも、ちょっと細工をして、おもしろいおもちゃにすることができたからです。

車大工さんの家に近づくにつれて、小さい太郎の胸は、わくわくしてきました。安雄さんがかぶと虫で、どんなおもしろいことを考え出してくれるか、と思ったからです。

ちょうど、小さい太郎のあごのところまである格子に、くびだけのせて、仕事場の中をのぞくと、安雄さんはおりました。おじさんとふたりで、仕事場のすみの砥石でかんなの刃をといでいました。よくみるときょうは、ちゃんと仕事着をきて、黒い前だれをかけています。

「そういうふうに力を入れるんじゃねえといったら、わからん奴だな」

とおじさんがぶつくさいいました。安雄さんは刃のとぎ方をおじさんに教わっているらしいのです。顔をまっかにして一生けんめいにやっています。それで、小さい太郎の方をいつまで待ってもみてくれません。

とうとう小さい太郎はしびれをきらして、

「安さん、安さん」

と小さい声でよびました。安雄さんにだけ聞こえればよかったのです。

しかし、こんなせまいところではそういうわけにはいきません。おじさんがききとがめました。おじさんは、いつもは子どもにむだ口なんかきいてくれるいい人ですが、きょうは、何かほかのことで腹を立てていたとみえて、太い眉根をぴくぴくと動かしながら、

「うちの安雄はな、もう今日から、一人前のおとなになったでな、子どもとは遊ばんでな、子どもは子どもと遊ぶがええぞや」

と、つっぱなすようにいいました。

すると安雄さんが小さい太郎の方をみて、しかたないように、かすかに笑いました。そしてまたすぐ、じぶんの手先に熱心な眼をむけました。

虫が枝から落ちるように、力なく小さい太郎は格子からはなれました。

そしてぶらぶらと歩いてゆきました。

五

小さい太郎の胸にふかい悲しみがわきあがりました。

安雄さんはもう小さい太郎のそばに帰ってはこないのです。もういっしょに遊ぶことはない

のです。お腹がいたいなら明日になればなおるでしょう。三河にもらわれていったって、いつかまた帰ってくることもあるでしょう。しかしおとなの世界にはいった人がもう子どもの世界に帰ってくることはないのです。

安雄さんは遠くにいきはしません。同じ村の、じき近くにいます。しかし、きょうから、安雄さんと小さい太郎はべつの世界にいるのです。いっしょに遊ぶことはないのです。

もう、ここにはなんにものぞみがのこされていませんでした。小さい太郎の胸には悲しみが空のようにひろくふかくうつろにひろがりました。

ある悲しみはなくことができます。ないて消すことができます。

しかしある悲しみはなくことができません。ないたって、どうしたって消すことはできないのです。いま、小さい太郎の胸にひろがった悲しみはなくことのできない悲しみでした。

そこで小さい太郎は、西の山の上に一つきり、ぽかんとある、ふちの赤い雲を、まぶしいものをみるように、眉をすこししかめながら長いあいだみているだけでした。かぶと虫がいつか指からすりぬけて、にげてしまったのにも気づかないで――

青空文庫情報

底本：「新美南吉童話集　2　おじいさんのランプ」大日本図書
1982（昭和57）年3月31日初版第1刷発行
1996（平成8）年2月15日初版第7刷発行
※表題は底本では、「小さい太郎《たろう》の悲しみ」となっています。
※誤植を疑った箇所を、「牛をつないだ椿の木」大和書店、1943（昭和18）年9月発行の表記にそって、あらためました。
入力：江村秀之
校正：諸富千英子
2018年2月25日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

小さい太郎の悲しみ

新美南吉

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/